
信じてる

灯月樹青

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
信じてる

【Nコード】
N5726D

【作者名】
灯月樹青

【あらすじ】
大好きなあなた――、私は待ってる。ずっと…ずっと――。■■■
■■■切ない恋って感じで描きました。

(前書き)

あなたなら、待ちますか？

「待ってて」

そういつて彼は去った。

「いつか戻ってくる」

そういつて彼はいなくなった。

もう何年も待ち続けている。

友達に言ったら、

「それって待ちぼうけじゃん！」

そう言われたけど、

それでも探すことなく私は待った。

彼の言葉を信じて。

ただ、待ち続けた。

手紙を――。

電話を――。

連絡を――。

彼自身を――！

でも…、

どんなに待っても、

電話の前で祈っても、

郵便受けの後ろで拝んでも、

彼からの連絡は何もなかった。

月日はゆっくり流れた。

彼と出会ってから始めての、

彼のいない誕生日、クリスマス、初詣。

どれも我慢できた。

「戻ってくる」

って約束したから。
でも…、

いつからだろう。

待つことが出来なくなったのは。

いつからだろう。

待つということが苦しくなったのは。

いつからだろう。

「それって…振られたんじゃない？」

何年も聞き流すことが出来た友達の言葉が、
胸を指すようになったのは――。

いつからだろう。

「そんな奴のこと忘れて新しい恋しなよ！」

そういう友達の言葉に光を見るようになったのは――。
いつからだろう。

新しい恋を試してみようと思ったのは――。

でもそんな時、

必ず彼の顔が浮かぶ。

約束どおり帰ってきた彼が、
シヨックを受けている姿が…。

（待ってて…っていったのに…）

そう聞いたそうに、

私を見つめる彼の顔が――。

そこでどうしてもまた思いとどまる。

「もうすぐだよ」

「もうすぐ彼は帰ってくる」

そう、自分に言い聞かせて――。

何の連絡もない彼を、

ただただ待っていた。

待つごとに疑う気持ちは生まれたけど、
彼の言葉だから、

好きな人の言葉だから、
信じる事が出来た。

そう。

——あの時まで——…。

その日私はなんとなく、
彼とよく行った波止場へと歩を進めた。
今考えればあれは、

——予感——

だったのかもしれない。
よく夕日を見ていたその波止場に着いたとき、
私はもしかしたら幸せだったのかもしれない。
だって、

彼の姿を見たのだから。

偶然か、

必然か、

神様の悪戯か。

そこには彼がいた。

ずっと、何の連絡もなかった彼が——。

——見知らぬ女の人と共に——。

彼はびっくりしたんだろう。

私の顔を人目見て、後は瞳を合わせようとはしなかった。
そのことで、目の前のことが現実だと知った。

夢ではないのだと。

その時、私の中で何かが弾けて消えた。

「ああ、そうだったんだ」

気づいたら口になっていた。

頭も感情もすんなりと、本当にすんなりと目の前の現実を受け入れた。

それと同時に湧き上がる、怒り。

女の人が憎いとは思わなかった。

感情の矛先は、信頼を裏切った彼にのみ向かった。

女の人の方はなんだかわからないのだろう。

きよんとしていた。

「結局友達の言ってた通り、ただの待ちぼうけだったんだ」

言葉に毒があることには気づいたが、言い直そうとは思わなかった。瞳はまだ私と瞳を合わせようとしないう彼を刺すように見ていた。

「あんた何年？何年で乗り換えたの？人を待たせといて」

声音は静かだった。

何年も付き合っていた彼には、私がとても怒っていることに気づいているだろう。

感情を表にだす私が本当に怒った時にのみ、それがフツと切れることを知っているのだから。

「――ロクデナシー――」

私は呟くようにそう言うと、踵を返した。

きつとこの場所にはもう来ないだろう。

彼と初めて会ったこの場所には…。

思い出がたくさんあるこの場所には…。

今になって涙が溢れる。

彼を疑う自分を戒めていた自分が許せなかった。

平気である場所にいた彼が許せなかった。

後々振り返ってみると、私は彼を5年半の間待ち続けた。

私は今、恋をしている。

あんな男のことを引きずるなんて許せないから。

彼を思っていた時間は忘れようと思う。

あんな時間はなかったんだ、そう自分に言い聞かせた。

けれどどうしても、なかったことには出来ない部分があることも知っている。

あの男の裏切りから、どうしても信じられない。今の彼を信じることが出来ない。

いくら好きになっても――。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5726d/>

信じてる

2010年10月11日01時12分発行